

## ヤンゴン支部に見る新たな息吹

第17回を迎えた「東京外語会有志による海外支部歴訪の旅」は、訪問先にヤンゴン支部を選び、本年2月6日から11日までの6日間の日程で行った。

旅の主目的であるヤンゴン支部との交歓会は到着翌日の7日(火)夕刻、ヤンゴン市内シャン・ヨウヤ・レストランに於いて開催し、日本からの訪問者16名、ヤンゴン支部から9名、留学生11名、特別参加2名、合計38名が出席した。

母校のGJO(Global Japan Office)第1号がヤンゴン大学に設置された機運に乗って、東京外語会のヤンゴン支部が昨年5月の理事会承認を得て設立されたことは、既に幹事の水口氏から「会報138号」誌上に詳しく報告されている通りであるが、今回の我々の訪問もこの海外53番目の支部誕生を記念し、新支部で活躍中の同窓諸氏の意気込みに接して声援を送り、更に、敬虔な仏教国であるミャンマーの歴史に触れると共に、新たな発展を展開しつつある様子確かめることも訪問の目的であった。

我々が交歓会会場に到着すると、島岡みぐさ支部長(外B1993)を始め幹事各位の歓迎を受けると共に、壁に掲げられた色鮮やかな「東京外語会ヤンゴン支部旗」に眼を奪われ、会員各位の意気込みを感じた。会は副支部長土屋宏樹氏(外D1991)の司会で進行し、支部長挨拶、訪問団団長(石原)挨拶に続いて



挨拶する島岡みぐさ支部長

石原 隆良(いしはら たかよし)(外D1956)

母校立石学長、長谷川理事長からのメッセージが披露された。

学長メッセージでは「GJOの第1号をヤンゴン大学に設置したことに呼応して同窓会支部が誕生したことは、時宜を得て誠に喜ばしい。GJOに学んだ方々がキーパーソンとなり、日緬両国の交流、協力関係が深まることを期待するとともに、その方々と現地駐在の皆さん方が親交を保ち、互いに学び合えるようになれば素晴らしい。」と述べられ、理事長メッセージでは「今、世界から最も脚光を浴びているミャンマーに新しく支部が出来たことは理事長として誠に嬉しい。写真で拝見する限り殆どの皆さんは平成の卒業生とお見受けした。母校の若い卒業生がミャンマーの地で絆を深めている姿を頼もしく、また、誇りに思っている。」と述べ、更に「自分は常々面倒見の良い、頼りになる外語会を目指しているが、それには支部活動が非常に重要だと考えている。」との言葉が添えられていた。

この訪問の計画段階で、我々幹事たちは、GJOの状況を見学出来れば幸いと期待していたが、大学内への部外者の多人数の入構は諸般の事情で困難とのことで、残念ながら諦めざるを得なかった。しかし、交歓会に出席されて、8ヵ月ぶりに再会の機を得た今井已知子先生からGJOでの学習の様子などを色々と聞かせて戴けたことは大きな収穫であった。

今回の交歓会で特筆すべきことは、11名の留学生の参加を得たことであり、支部と留学生たちとの日頃の連絡が保たれている様子を嬉しく思い、更に、今回の参加が支部の招待によるものであることに大いに感心させられた。これまでの交歓会でこれ程の人数の留学生の参加を得たことはなく、その上「日本から来られた多くの大先輩に会えて感激した」との挨拶を受けたのは、我々にとっては画期的な出来事であるが、それがほぼ全員女性であったことも新鮮な驚きであった。



ヤンゴン支部との交歓会、留学生11名参加で大盛り上がり!

また、この交歓会に特別参加として、シドニー外語会会長の高橋ゆり氏(院B1990)の出席を得たことも特筆に値する。高橋会長と島岡支部長とは旧知の間であり、互いに良き相談相手であることはそれぞれの支部運営にも力強いことであろう。シドニー外語会は前回の訪問先であるので我々にとっても懐かしく、高橋会長との思い出話も加わって大いに盛り上がった。所用のついでとのことながら、遠路を飛来してこの交歓会に参加された友情に拍手を送る思いであった。振り返れば、第15回トルコ(カディザーデ支部長)、第16回シドニー、第17回ヤンゴン共に女性の支部長であり、会員の多くが若い世代

であることも共通している。この3支部を続けて訪問したことによって得た印象は、海外支部が一つの転換期を迎えつつあるのではないかとの思いであり、3支部長の様子を髣髴と思い浮かべる裡に、海外支部の地域サミットの夢も一歩実現に近付いたような楽しみが浮かんできた。

20年の歳月をかけて海外支部の3分の1を廻ったことは、貴重な体験であると共に、新たな課題の発見であるのかも知れない。

翌日から、各地を廻って歴史や風物を学んだ記録は、メールマガジンに掲載致します。